

2024 年度 奨学生 総評

○ 林 桂 ○

応募 43 編の中から、推薦した 15 人の作品の評を以下に。配列は応募順である。作者名の後に、* 印のある作者が、奨学生となった人であり、ない人は推薦の効なく惜しくも奨学生とならなかった人である。ただ、私に於いては優れた表現者としてまったく遜色ない。記して讃えるものである。

また、15 人は、与えられた推薦枠でのもので、16 人目と明瞭な差がある訳でもない。

● 洋梨 またら ● 高校生

また会って
成長痛の傷跡を
隠さなくてもいい百日紅

捲る袖 ブーゲンビリアを
摘み取った
坂道登りと
カブトムシの匂い

スマホの熱で蕩ける雪は
電車を止められない雪

【評】詩の文体で書く数少ない貴重な作者。感性の佳さは群を抜いていて、しかも若さが気持ちよい。大切に育てたい才能であり、強い思いで推薦した。

● 有野水都 ● 高校生 *

桜の実都に水路の広がって

ヘアオイルに髪は包まれ冬林檎

冴返るティーカップに爪あたる音

【評】俳句文体で書く作者。取り合わせの二つの事象の距離感の感覚がよい。俳句らしい表現に素直に従っていながら、切り取り方に才能を感じさせる。

● 金光舞 ● 高校生 *

水掻きは持っていない

けど、泳げるよ

夕日が降るちょっと前のまちを

熱のある母さんのため買ってきた
ばにらあいすをゆるりとすくう

大人は大変そう、と
ゾウが鳴く
子供も大変だよ
蟻を靴で擦り潰したり、とか

【評】俳句、短歌、詩、いずれの文体で書く。子どもの視点を装い、私たちが失った感性を明らかにする。中では詩の文体が優れていると思える。

● 桜咲 ●

春のかぜ
ひよこのまわりで
大はしゃぎ

夏はここ

すいかの種
もろこしのひげ

ひぐらしの
ように転がる缶の音
今の季節を確かめる朝

【評】この作者の佳さは、言葉が明るいと
ころだろう。世界を見る目が明るいとい
うことでもあろう。現在の俳人言えば、

池田澄子さんに通じる。この欄では異質に見えるが、それゆえに大切にしたい才能だ。

● 中矢 温 ● *

鬱血させてみる六月のくすりゆび

踊るとき鳴る床九月なのでしょう

一月の羊一頭ずつ食べる

【評】俳句文体の作者。日々の暮らしの中で湧き、遭遇する言葉を拾う段階から、テーマを「書く」という意志的段階に進んでいる。「月」を選んだ群作は、興味深い。なぜその月か。作品文脈の中で、説得力がなければならない。思いの外難しい。私の愛唱句は、「あたたかき十一月もすみにけり」(中村草田男)「三月の甘納豆のうふふふ」(坪内稔典)など。難しいけれど、面白い対象だ。

● 長谷川 柊 香 ● *

地下室の羽化する兄へ放る葡萄

手の影を生む栞を抜くために

ピアノさぼった僕を
殴る母
ねぎのにおいがした

【評】俳句文体の作者。心の微妙な陰影を書く。この作者も何を書くか、自覚的に進める段階に来ている。益々書くのが大変になるだろう。ゆえに注目していきたい。

● 佐藤ことみ ●

祖母が流しに立ちながら
施設に入りたいという
いつもより甘い煮物を作る

飲みかけのコーラは
ただの水になり
おじいちゃんは
ただの写真になった

見知らぬ後ろの人のために
いつもより大きめに扉を開ける

【評】詩文体、時に自由律短律句文体を交える作者。日常の中から言葉を感情を拾う。祖父母に対する思いや、他人への繊細な思いに揺らぎながら生きている。それは大なり小なり私たちの中にあるものだ。祖父の死後の祖母の中の孤独感を見

つける視力に心打たれる。大切な作者だ
と思う。

● 小島涼我 ●

校正で誤字を見つけた春の日の
桜ざわざわ咲く吉野山

夜の川の水面に桜が落ちてゆく
嬉しさはときどき寂しさになる

約束が約束のまま消えた日の
シンクに泡が吸い込まれていく

【評】短歌文体の作者。最もオーソドックスな青春短歌。「なんどあってもいいですからね」という美しさがある。大学で日本文学を学んでいる人のようだ。その意味でも足腰のしっかりした作者だ。長い目で見たときに残るのは、このような学びを伴った作者だろう。期待する。

● azusa ●

透明な星に座れば向こうにも
鏡のように少年がいた

響き合う階下の食器朝の虹

フライパンにバターを載せて
星月夜

雨の夜は銀河からバスが出ている

【評】俳句文体が基本の作者。多作家ではないのかもしれない。正直、十編まとめた今回の作品を見るまで、特に印象に残っているという作者ではなかった。しかし、感覚の良さが際立っていることに驚いた。口語詩句の層の厚さを感じさせた作者である。今後に期待したい。

● 吉沢美香 ● *

雪の原血液型を教えあう

耳朶の産毛のように石鹼玉

蝶の昼さりさりさりと砂時計

春光の中に鏡が一つ足りない

【評】俳句文体の作者。作品のレベルが安定している。若書きのよろしさの中にいる。

● 日下部友奏 ●

蠅 螂 の 目 が 藍 色 に な る 角 度

か た つ む り ど う や ら サ ン ゴ 礁 の 夢

フ ト ー コ ー フ ト ー コ ー
ま た 小 鳥 来 る

【評】俳句文体の作者。自身の内面との対話が作品となる。作品を「書く」ことが作者にとって欠くべからざるものであることを感じさせる。「書く」という表現のなかに救いを見つけている。こうした作品行為との距離感は大切だ。

● 三矢フミ ●

あ な た た ち
で は な い わ た し
澁 谷 の 雑 踏 に の み 降 り し き る 恩 寵

色 褪 せ た 路 線 図 に 探 す 現 在 地
従 姉 妹 は こ ど も を 産 ん だ と い う

手 術 後 の 仮 眠 を と る 医 者 た ち を
防 空 壕 へ と 急 か す サ イ レ ン

冬の火よ
白い脚からさかさまに
引き摺られていくミチコの軀

ぼくの非を
雪の浜辺に横たわる幼い鯨に
喩えてくれた

眠らずにわたしの寝顔を見届けた
あなたの朝にオムレツを焼く

こどもらは海岸通りに凧をあげ
空の高さの静まりを識る

そしてまた次の夏への帰りみち
巨きな懐かしさのほうへ

【評】短歌文体の作者。この作者も十編まとめた作品を見て驚かされた。現在の言葉が浮遊するような作風からは遠い。言葉が重い。しかも、社会的な批評がある。私性と相俟って、奥行きのある言葉になっている。これが本当に青年の作品なのだろうか。「サイレン」は、ウクライナなどを想起させる戦火想望。「ミチコ」は、私などには樺美智子を思い起こさせる。本格的な表現者だ。

深呼吸するための廃墟をさがす

朝、君は砕けば硝子になるのか

図書館の影を踏んでるピアニスト

【評】いくつかの文体を使用するが、短律の自由律俳句文体が印象的。孤立、孤独の影を表現する形式として使用されている。記述する内容は、記述する文体を選ぶ。そのことに自覚的な作者だろう。

● 松下 誠一 ● *

梟のおともだちならしょうがない

アリバイがあった花から帰らせる

鼓笛隊だから両手で食べる雪

両ひざにルビをふりたくなる寒さ

【評】俳句文体（川柳文体？）の作者。独特の世界を確立しつつある。俳句の先人を思い浮かべても、ぴたりと一致する人がいない。一物仕立ての文体に脱力系の言葉を並べながら、屈折した詩的世界を描く。

● さ い う ● ＊

よざくらの発光
じょじょに淡くなり
きみの眼窩のみずぎわを 押す

ほんだなの奥
から
ばにらの匂いの
月 をとりだす

ばんそうこう
剥がしきれずに夜光虫
など
をあなたと見ていたいただけ

にゃふ、にゃふと
ふたつ咳き込む友の手に
あぶらつやめくゲルニカの模写

すいれんの閉じる
に併せ
ねむる祖母の
まぶたに溜まる月光のあお

自傷行為
として
こおりを噛むときの
日焼けしてゆくセーラーの襟

【評】短歌文体の作者。独特の改行を含めて、口語詩句の行空間を生かした表現者として際立つ。詩的なイメージの飛躍にも惹かれる。ひらがな使用も柔らかい印象を演出する。最も自覚的な方法を持つ一人だろう。

〈総評〉

投稿者の層が厚くなり、多彩になっている。十分に目配りしながら選考をしてきたつもりであったが、改めて提出の十編を読むと、気づかないでいた作者の姿が見えたりした。同一作者でも、選考者によって推す作品が違い、重ならないとは感じていたが、もっと深くに根があるようだ。応募しない人の中にも印象的な作品を持つ作者は多い。

選ぶ行為は、選ばれる者に最後は選び直される。完全は不可能なことではあるが、果たして見落としがなかったか、自ら問うこととなった。選する者が選ばれ続けなければ、優れた作者の場にはならない。任に応えられているか。改めて自省する機会となった。